

花嫁は一枚の見合い写真
を手に海を渡っていった

写婚妻

工藤美代子著

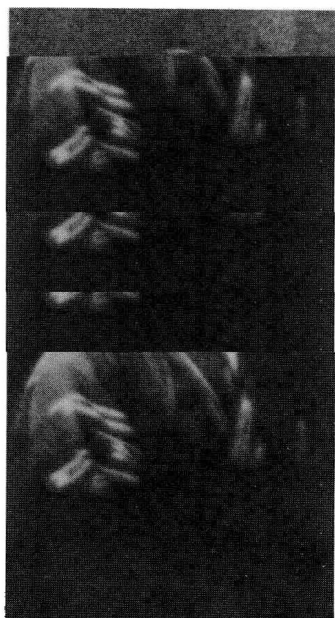


ドメス出版

写婚妻

花嫁は一枚の見合い写真
を手に海を渡っていった

工藤美代子著



ドメス出版

工藤 美代子 くどう みよこ

1950年 東京に生まれる

1968年 大妻女子高校卒業

1968～70年 チェコスロヴァキア，カレル大学に留学

1973年 カナダに移住，現在に至る

専攻 日系移民史

著書 『晚香坡の愛——田村俊子と鈴木悦』（共著，ドメス出版）

『黄色い兵士達——第一次大戦日系カナダ義勇兵の記録』（恒文社）

写婚妻——花嫁は一枚の見合い写真を手に
海を渡っていった

1983年8月2日 第1刷発行

定価 1300円

著者 工藤美代子

発行者 今田喬士

発行所 株式会社 ドメス出版

東京都豊島区駒込1-3-15

振替 東京 8-48766

電話 03-944-5651

印刷所 株式会社 太平印刷社

落丁・乱丁の場合はおとりかえいたします

製本／明光社

©Miyoko Kudo 1983 printed in Japan

写婚妻——花嫁は一枚の見合い写真を手に海を渡っていった・もくじ

はじめに

7

第一章 スティーヴストンの写婚妻

11

村上 ツネさん

(九四歳)

私らにも知らんで来ましたから／日本女性
第一号はおかめさん

吉田 さん(仮名)

(九三歳)

アメリカには金のある木がある／女がみんな
働かにならんことで／戦争できれいにぶち
取られた

第二章 ホープの写婚妻

33

佐々木スガエさん

(八六歳)

パウエル街「松の湯」のおかみ／ゆれる娘心
と船中の恋／悪徳通訳に泣かされた写婚妻／
ケンカなんかしたことありません／財産を流
したと思えばそれでええ

第三章 日市の写婚妻

55

西川 さん(仮名)

(八六歳)

ヴィクトリアの岸壁に立つ男たち／太平洋が
なかったら歩いて帰る／移民地における愛の
破綻／次から次へと八人の子ども／もう日本
へ行く気はないですよ

第四章 ビームス・ビルの写真妻 73

山崎 スノさん すべて神様におまかせしてきました／御飯に

(九二歳) 味噌汁そして日本風呂

藤田 マチさん 「女の道」教えて送り出した父／一青年から

(九〇歳) 領事への公開状／どれが苦勞やらわからんで

すわ

第五章 トロントの写真妻 93

相次ぐ写真妻の墮落ち事件／与謝野晶子の写真妻観

和泉 きんさん 結婚の問題は愛の問題である／二、三年で帰るつもりで……

横井 さん(仮名) ハズバンドには苦勞しました／どこまでも貞淑であるべきこと／この世に地獄があるのだから／我等兩人絶縁することに相成り候

第六章 レイモンドの写真妻 131

「娘のときは親まかせ、嫁にいったらミスターまかせ／『加奈陀の魔窟』の女性たち／

第七章

日本の写婚妻

中津 フデさん

(九三歳)

小川さん(仮名)

(七五歳)

河野さん(仮名)

(八四歳)

小谷田 イサさん

(八六歳)

岩浅 伊都さん

(九四歳)

「飛んだ写真結婚」の結末

毎朝はだし参りをしてくれた母／夫婦別れした人なかったですよ

お産はもちろん家でやりました／富士山を喜んだパパさん

うちには博士が二人おります／もうすぐ五世の時代になります

163

和歌山県のアメリカ村／写真なんかやりとりせんと行つた／幸せ薄う生まれた宿命やさかい／移民送り出しの唄

昭和三年、写真結婚ついに禁止／イチかバチか帰ってみよう思うてね／じつとしてたら、やってけなかった

カバー写真

写婚妻、藤田マチさんの見合い写真

とびら写真

写婚妻、小川さん（仮名）の娘時代

文中各章とびら写真

第一章 村上ツネさんと家族

第二章 佐々木スガエさん

第三章 今世紀初頭の日本人街

（ブリテイッシュ・コロンビア大学所蔵）

第四章 藤田マチさんと家族

第五章 和泉きんさんと夫

第六章 小谷田イサさんと夫

第七章 小川さん（仮名）と夫

装幀

入野正男

はじめに

どうしようもない重さであった。昨年の春から秋にかけて、私はカナダおよび日本の各地に散在する、写婚妻たちを訪ね歩く旅を続けた。一人捜しあて、一人インタビューをするたびに、私の背中にドスンと重たいなにかがかぶさるようだった。

写婚妻——といっても、今の日本でこの言葉の意味を知る人は少ないだろう。明治から大正にかけてのことである。日本の貧しい漁村や農村の娘たちが、まだ見ぬ夫と華やかな外国生活に憧れて、続々と海を渡った。多くの場合、北米に移民した日本人男性が故郷に手紙と写真を送り、花嫁捜しを依頼する。頼まれた仲人は適当な娘を物色し、その写真を男性に送った。おたがいに写真を見て良いとなれば、花嫁は日本で入籍し、六カ月後に旅券が降りると、単身夫の待つ北米へ渡る。

つまり、すべての判断は相手から送られてくる写真一枚にかかっていた。だから、この結婚は「写真結婚」と呼ばれ、写真結婚で嫁いで来た女性には「写婚妻」と呼ばれた。

それにしても、たった一枚の写真で、よくも遠い異国に嫁いだものである。人間は一生の間に

何度か決断を迫られる時がある。どんなに平穩無事な人生にも、それはあるだろう。しかし、結婚ほど大きな決断は、そうざらにはないのではないか。

いともやすやすと、顔も見ない男性のところへ嫁いだ女性の心理は、私には不可解だった。現代の常識から考えれば、それは無謀とも言える行為だろう。だからこそ知りたいと思った。そうした女性たちの心の軌跡を、なにが、彼女たちを異国の地に送り出したかを知りたかった。私のリサーチは、いつもこんな単純な好奇心から始まる。とにかく資料を集めてみて、それから先のことはまた考えようと、聞き書きの旅を開始したのは昨年の春だった。

写婚妻の数は当初予想したよりずっと少なかった。カナダで写真結婚がピークを迎えるのは、大正二（一九一三）年である。今から七〇年も前の花嫁が生きているのを期待するほうが、間違っていたのかもしれない。それでもカナダで一人、日本で二人の写婚妻だった方がインタビューに応じてくれた。

私は彼女たちの話を聞いて、写真結婚に飛び込んだ動機よりなにより、一人ひとりの女性が異国で歩んだ道程の方に圧倒されてしまった。九〇歳の老女が九〇年の間抱きかかえてきた思いを、どっと押し流してくるようで、私はたじたとになった。三〇年ちよっとしか生きていない私に、どうやってこの人たちの人生の重さを背負うことができようか。写婚妻たちが、真剣に思いのたけを語ってくれればくれるほど、押しつぶされそうな重圧は増すのだった。

集められた資料の山の前に、今度はこれを文字に変え、活字にする作業の難しさが、あらたな重荷となって迫ってくる。忠実に、見たこと、感じたことを記すしか方法はないだろう。写婚妻と呼ばれ、異国に精一杯生きた女性たちの全貌を書き切ることなど、私にはとうてい不可能だが、せめて歴史の亀裂に埋もれて、忘れ去られようとする海を渡った花嫁たちの、なんらかの記録をこの世に残したい。そうすることによって、この背中の重さを少しでも多くの人たちと分かち合えるのではないかと思う。

第一章 スティーヴストンの写婚妻



◆私らなにも知らんで来ましたから

「私はもう目エがうすくてね、あんまりよく見えませんよ。年は九四ですわ。ハタチでここへ来ましたです」

透き通るように色の白い老女が一人、ぽつんと椅子に坐っている。村上ツネさん——おそらく現在カナダに生きている写婚妻の中では、最も早く海を渡った人だろう。

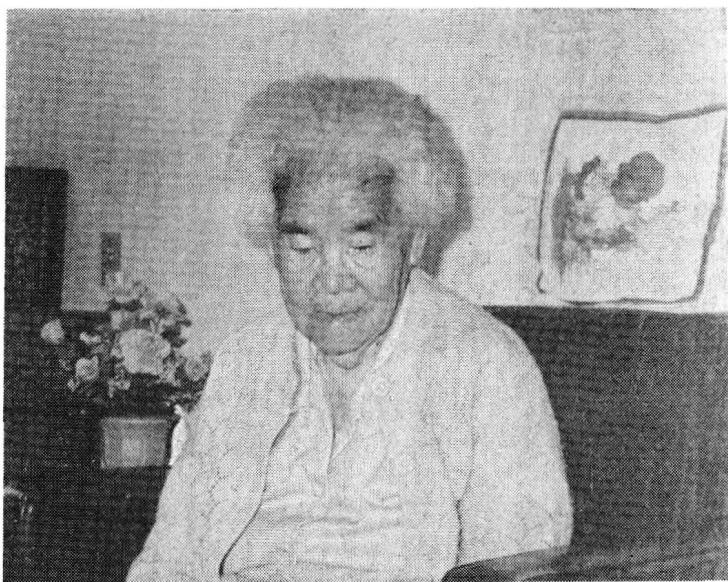
ヴァンクーヴァーの近郊、ステイヴストンにある白人経営の養老院の一室だった。ベッドも家具も、すべて白人サイズにできているので、小柄な村上さんはよけい小さく見える。

「日本はあの、因の島いうところから来ました。さあどこから船に乗ったのやら、友だちがやっぱし同じとこの人でね、一緒に乗ったのだけど覚えてない。私らなにも知らんで来ましたから。そう、写真結婚ですよ」

ゆつくりと、途切れ途切れに、村上さんは話す。遠い昔の出来事を思い出すのは、かなりの努力がいるようだ。

「ハズバンドはヴィクトリアに迎えに来ましたよ。このステヴストンでね、やっぱし漁師してあったの。私は子どもでけたら子守りぐらいのもんよね。ノー、キャナリー（缶詰工場）にもどっこにも働きにや出んかった。

日本へは一回いんだきりでの。別に帰りたいことなかった。ハズバンドがよう他人の面倒



現在の村上ツネさん (94歳)

見る人やつたからね」

満足そうにうなずくと、村上さんは頭を垂れて物思いにせずむ表情になった。

九四年の生涯を要約してしまえば、これだけのことなのだろう。長いまつ毛をじつと伏せたまま動かない。

現在九四歳の村上さんが二〇歳の時に渡航したというのだから、明治四一（一九〇八）年頃だろうか。ちょうど「ルミュー協約」が結ばれ、日本からカナダへの移民数が年間四〇〇名に制限された年である。だが、妻子の呼び寄せには制限がなかったので、この年を境にどっと写真結婚が増えるようになる。

「もう今年で九七年ですよ」

思い出したように村上さんが口を開い

た。それは多分、御主人が亡くなってからという意味だろうと、私は解釈した。昔の写真はありますかと聞くと、ゆっくりと答が返ってきた。

「写真だったって、写真なんかうつさんかったですよ。ここへは何も持って来てないの。もう年取ったからな、嫁さんがおるから、おつかさんおったって、なにもすることないからな。それでここへ来たの。みんな家へおいて来て、ここには寝道具もない」

そして、すぐこの近所に長男夫婦の家があると、やはり緩慢なリズムで教えてくれた。私は村上さんの若い頃の写真だけでも見せてもらいたいと考え、長男の清さんの家を訪ねてみた。

「へー、母がそんなに話をしましたか？」

清さんは不思議そうに首をふる。

「あんたが、養老院から来たと言った時は、もう心臓が止まるほど驚いた」と、清さんの奥さんは、まだびっくりした表情でまじまじと私の顔を見る。

よく話を聞いてみると、村上さんはつい二週間ほど前、危篤状態に陥り、やっと二、三日前に二四時間看護が取れたばかりなのだという。だから、私が養老院から来たと言った時、奥さんはまた危篤の報せが来たのかと勘違いし、あわててしまったのだ。

他人と話ができるほどに村上さんが回復しているとは、清さんも奥さんも思っていなかった。たしかに村上さんはブルーのワンピースを着て、ちんまりと大きな椅子に坐っていた。私の目に